

論文の要旨

論文題目 ディケンズの歴史観 - 『バーナビー・ラッジ』、
『二都物語』、 『子供のための英国史』 研究
氏名 矢次 綾
学位 博士（文学）
授与年月日 平成 20 年 10 月 29 日

本研究は、ヨーロッパ規模で人々の歴史意識が喚起された 19 世紀の社会的、文化的、思想的文脈の中で、ディケンズが『バーナビー・ラッジ』、『二都物語』、『子供のための英国史』を通してどのような歴史観を提示しているかを解明するものである。解明にあたって、小説家が描いた歴史 と 歴史学者が描いた歴史 の間にはいかなる相違があるのか、小説家が歴史を描くときにどのような方法があるのかという点に留意する。以上の考察を行う前提として射程に入れているのは、ディケンズ研究史において歴史小説や歴史観がどう論じられてきたか、そして、ルカーチの『歴史小説論』に始まる現在の歴史小説研究や、ピーター・ゲイといった歴史家による歴史小説論において、ディケンズがいかなる位置を占めているかである。ディケンズの歴史の捉え方や描き方を解明する鍵として、バフチンのカーニバル理論とフロイトの精神分析理論を挙げる。バフチンに着目するのはディケンズの小説がポリフォニー的な要素を持つためである。フロイトについては、現在ピーター・ゲイたちが歴史研究におけるフロイトの精神分析理論の有用性を主張しているが、19 世紀に描かれたディケンズの歴史小説の中に歴史と精神分析の関連を読み取ることができるからである。

論文は全体を三部構成とし、その前後に序章と終章を付している。第 1 部は『バーナビー・ラッジ』に焦点を当てる。第 1 章「変化と不変」では、歴史上の事件であるゴードン暴動に遭遇した登場人物が歴史的な変化を実感する様子について、ディケンズがいかに描いているかを検証する。ルカーチが指摘しているように、フランス革命とナポレオン戦争の勃発によってヨーロッパの人々は歴史的な変化が実際に起きることを知らされたが、ディケンズはゴードン暴動が人々に同様の意識の変化をもたらしたと考えている。以上の検証を行う際に、ディケンズが暴動をバフチン的なカーニバルとして描いている点を考慮に入れた。第 2 章「他者の歴史」では、社会の中心部に位置しているように見える人物が

時代を後退させる旧勢力として時代を前進させる新勢力とせめぎ合いを演じている点、旧勢力が社会的な他者として描かれている点に注目している。18世紀末は、イギリス人が宗教的な差異を基にヨーロッパ内の他の民族などに優越意識を持っていた時代から、発達した科学技術を基にアジア人やアフリカ人に対して優越意識を持つようになる時代への転換期であった。ディケンズがこのような時代の変化を感じ取っていたことは、『バーナビー・ラッジ』における旧勢力が宗教を笠に着て内紛を起こした人物である点や、新勢力が活躍の場を求めて海外に進出した人物として描いている点から証明できる。第3章「歴史記述のフィクション性と狂人——『ミドロージャンの心臓』との比較」では、ディケンズとスコットの影響関係、類似点、相違点を明らかにしたが、その際に19世紀のイギリスにおいて歴史のフィクション性を巡って議論が交わされていたことを念頭に置いた。なぜなら、ディケンズとスコットは歴史記述に書き手の恣意が作用していると認識していた点において共通しているが、歴史的な事実に反することを小説に導入するかどうかにについては異なった見解を持っていたからである。両者の見解を考察する際には、各々が自分自身の代弁者として登場させた狂人に着目している。

第2部は『二都物語』に焦点を当てる。第4章「日常化したカーニバル——革命空間の集団および個人」では、ディケンズが祝祭としてのカーニバルではなく日常化したカーニバルを描きながら、フランス革命後の未曾有の混乱を描いている点に着眼する。このように特異なカーニバルを通して、ディケンズは人物たちの心理状態を描くだけでなく、フランス革命と同規模の混乱が19世紀のイギリスで起きるのではないかという懸念から、彼自身が集団というものに対して持っていた^{アンビヴァレンス}両価感情を表出させてもいる。第5章「歴史編纂——過去の暴露と現在の再構築」では、ディケンズが歴史編纂と精神分析という二つの要素を『二都物語』に導入している点について考察した。この二つの要素は本来相容れない。歴史編纂が過去と現在の断絶を前提とするのに対し、精神分析は過去にさかのぼって現在を再構築する行為を指すからである。共和主義者は革命勃発によって時代が王制と共和制とに分けられたことを利用し、共和国成立を正当化する歴史を編纂しようとするが、その一方で、マネットとダーネイという二人の主要人物が現在を過去から分断させるのを許さず、バスチーユ監獄攻撃の際に発見された手記が書かれた時点、さらには手記に書かれた事件が起きた時点にまでさかのぼって現在行うべきことを決めるよう彼らに強制している。ディケンズはこのような共和主義者の恣意性に反発したのである。第6章「フランス革命期を描く小説の歴史性——『ラ・ヴァンデ』、『ふくろう党』、『九十三年』との比較」では、『二都物語』と章題に挙げた3作という（主に恐怖時代を描いた）小説を比較検討する。まずは『二都物語』と『ラ・ヴァンデ』を比較しながら、ディケンズとトロロ

プがフランス革命の何に着目して小説に描いたかについて考察し、その上で、この英文学の二人の作家と仏文学の二人の作家（バルザックとユゴー）を俎上に載せ、フランス革命や歴史そのものに対する姿勢にどのような違いがあるかに議論を発展させた。

第3部は『子供のための英国史』に焦点を当てる。ディケンズが先史時代から名誉革命までのイギリス史を子供向けに平易な英語で描いたこの作品は、読まれることも論じられることも少なく、「忘れ去られた本」とさえ呼ばれている。しかし、人々の歴史意識が高まり、種々の歴史書や歴史の手引書が執筆された19世紀に、ディケンズもまた子供のための歴史物語を執筆したことは注目に値する。第7章「『子供のための英国史』とその背景（1）——19世紀における歴史の手引き探求」では、ディケンズの歴史物語執筆の動機を念頭に置き、彼がどのような歴史を『子供のための英国史』の中で展開しようとしたのかを浮き彫りにする。その際、19世紀のイギリスで最も人気があった『マーカム夫人の英国史』および『アーサー君の英国史』と『子供のための英国史』との違い、歴史教育に対するディケンズの考え、当時の人々が歴史教育に何を期待したか、歴史教育とナショナリズムの構築との関わりに着目した。第8章「『子供のための英国史』とその背景（2）——19世紀における現在および過去に関する議論」では、マコーリーが構築しつつあった時間に対する一般的な風潮と、彼の考える歴史記述のあり方に対して、ディケンズがいかに反応したかについて論じている。その際に、ディケンズが『イグザミナー』誌に投稿した諷刺詩や中篇小説の『鐘の音』、彼が『子供のための英国史』の種本にしたキートリーの『英国史』などを比較材料として用いた。第9章「『子供のための英国史』に描かれなかった過去、現在、未来」では、『子供のための英国史』が連載された『ハウスホールド・ワーズ』という文脈や、ほぼ同時期に執筆された『荒涼館』、ディケンズが子供のための歴史物語執筆を最初に言明した1843年に出版された『クリスマス・キャロル』を取り上げながら、彼が『子供のための英国史』に書きこむことができなかった過去、現在、未来についての考えを浮き彫りにした。

以上の分析から導き出した結論の一つ目は、ディケンズは復古主義を批判し、過去の歴史に否定的な態度を取っているが、過去を教訓に未来を志向する態度を肯定していることである。二つ目は、カーライルの影響から持つに至った循環的な歴史観、子供時代の経験、社会改革者的なものから見方から、ディケンズが過去は現在に憑依しているという考えを抱いていることである。